

## 山芋

旅行の好きな仲間と話をしていると、なかなか面白い。再度行きたいという所の一つに、必ず日光がある。私も賛成である。

日光東照宮には徳川家康を主祭神とし、豊臣秀吉、源頼朝を合せ祭ると辞典にあるのを見て、急に興味が湧き、出かけたことがある。

五十数棟の建築は見事という外はない。然し私が再度行きたいと思うのは外の理由である。羊かんが欲しいのである。「祢りようかん」と呼ばれる本練りの羊かんは、十勝産の小豆を使い、砂糖だけで練り上げたもの、石臼や薪を使う伝統的な製法は、明治元年の創業以来、変わることなく守られ続けている。また製法だけでなく、売り方にもこだわりを持ち、一人一本までの販売である。数にも限りがあるため、早々に売り切れてしまう。そのことから日光で買えないものひとつと言われている。

一本千五百円だがさして大きくはない。私はこの羊かんが欲しくて日光に行きたいのである。あの味が忘れられないのである。体調がよければ今一度出かけて、羊かんを手にとりたいと願っている。

博多の名物といえば辛子明太子であろう。多くの製品があるが一番旨いのはどの品か、最近やっと探し当てた。小さな店だがとにかく旨い。

漬物といえば京都が有名だが、奈良・名古屋の外かくれた品が各所にある。私が好きなのは、茨城県取手市の鉄砲漬である。年に何回か知人が送ってくれるので、感謝している。

菓子となるとなかなか選ぶのが困難である。京都・松江の外数多くある。忘れてならないのは、埼玉県熊谷市の五家宝である。絶品である。年に二回知人が送ってくれるのが嬉しくて仕方がない。

そば好きの私を池波正太郎の小説で有名な浅草のそば屋に知人が案内してくれた。しかし驚くほどの味ではなかった。松江の出雲そばは、だしが極上であつたと妻は言った。現在は福岡の大濠そばで我慢している。

うどんは四国である。高松の空港からさして遠くないところに古い店があつた。現在はどうなっているのだろうか。

航空賃を払っても惜しくないほどの旨さだつた。も一度訪れてみたいと思つている。

セブ島の船舶司令部に待機していた当時のことである。初年兵のEが病に倒れた。もう幾日も、めしも乾パンものどを通らず寝たままだつた。

眼はくぼみ、頬の肉は落ちていた。額に手をあてると、ひどい熱だつた。私を見つめる眼には涙が見え、そう長くはないだろう、そんな予感がした。

原地の少年に、煙草ハンカチなどをやり、パイヤを手に入れ差し出したら、驚いたことに食べることに

ができた。パイヤだけはのどを通ったのである。

いいパイヤを毎日手に入れるのは容易ではなかったが、若くして食うものも食わず、死んでゆくのは哀れと思ひ、私は全力を尽くした。

十日後にはうそのように体力が回復した。起き上がった彼が手を合せて私を拜んだので、「やめてくれ」と叫び、その場から逃げ出した。

古い兵が初年兵の世話をするのは当時は珍しく、話題にもなった。

終戦後四十年を経て、彼が突如わが家を訪れた。しっかりと私の手を握り、ただ泣くだけの彼だった。

海外にも度々出かける一流の音楽家になり、世界的ジャズ・ピアニストの山下洋輔氏を始めかなりの音楽家を育ててきている。彼と同道して来たソプラノ歌手は私達の会話を聞いて目を赤くしていた。

果物店・スーパーなどでパイヤに出会うと、必ず合掌をする彼である。あの時のパイヤの不思議な力に、いまなお驚いている私である。

小学校から中学校へ転出して驚いたことは、給食用のパンが一個から二個になったことである。一個でさえ完食することが出来ずに困っているのに頭の痛いこととなった。

日頃は優しい給食担当の養護の先生が、給食の時間になると、チラリ、チラリと私の方を見るので、随分と肩身の狭い思いをしたものである。

生徒の中にも私と同じような者がいて、厳しい指導を受けていた。C少年もその中の一人である。

休日のある日、レストランに入ったら家で収穫した野菜を納入しているC少年を見た。用件が済んだら

しい少年をテーブルに呼び、私と同じものを注文してすすめた。だが全く食べないので別のものを追加注文した。しかし珍しそうに眺めるだけで食べようとはしなかった。

奥の方で小母ちゃんが手招きするので行くと

「あの子がなぜ料理に箸をつけんとか、わからんですか。学校に勤めていてそれぐらいのことがわからんですか。あの子には弟妹が八人いるとです。学校の給食パンをこの上もないご馳走のように思っている弟や妹のため、給食パンに殆んど手をつけず持ち帰り、分けてやつとるとですよ。どんな辛いことも空腹も耐え忍んでいるとです。テーブルの上の料理あんなものは一度も食べたことはいないと思えますよ。料理は全部持たせて帰しますが、それがいいことかどうか、私にはわかりません。料理代二千四百円、先生と折半しましょう。千二百円下さい」

顔をくしゃくしゃにして、流れる涙を拭きもせず小母ちゃんは一気にしゃべった。私は言葉もなく、ただうなづくだけだった。

出張からの帰り学校に寄ったら、事務室の私の机の上に新聞紙にくるんだ見事な山芋が二本置いてあった。

ピンときた私はレストランへ行き、小母ちゃんに手渡した。いろいろ言う必要もなかった。

二日後レストランに寄ったら

「先生、待つとつたですよ。主人もまだか、まだかと言つとりましたよ。あの山芋旨かったですよ。いままで食べたどんな料理より旨かったです。山芋はあの子の家の大切な収入なのに……。あの子の気

持を思うと、たまらんごとくなって泣きながらとろろ汁を食べていたら、主人があきれたような顔で

『お前泣くか、食べるか、どっちかにしたら』

と言うので

『そがん閑はなか』

と言い返したとです。すると主人が 『あの子いい面構えしとるよなあ。いちいち言い訳を口にせんとこがいい。いい根性しとるよ。今度あの子と会った時、山芋の代金を差し出すようなことはすんなよなあ。旨かったの一声でいいんだ。生活はきついても先生の机の上に黙って山芋を置いて去った、あの子の心意気を買ってやらんばね。

まだ少年だがちゃんと男を立ててやらんとね』

こう言うのですよ」

小母ちゃんは少し顔を赤らめて

「さんざん苦勞した若いころのこと思い出すのでしよう。♪包丁一本晒しに巻いて……。酔っぱらうと必ずこの歌を一つ、泣きそうな顔をして歌う、うちの父ちゃん、いいところあ……。」  
後はしゃくりあげて、言葉にならなかった。

涙が頬を濡らしていた。

「いま主人が料理を持って来ますから、どうか召し上がって下さい」  
間もなく主人が麦飯と、とろろ汁、それに自慢の漬物を運んで来た。

私は立ち上がって、深く頭を下げた。主人は

「母ちゃんがいろいろ失礼なことばかり言っていて、すみません」

と言い、私が箸をつけるのを待っている様子だった。

貧しさと日々闘っている少年のことを思ったのか、主人の頬に涙がひと筋走った。

私は山芋を食べながら、こみあげてくる涙をどうしようもなく、目を閉じて声を出さずに泣いた。

